

第一生命ホルモンのあたり

予告編

## I：「第一生命ホール」前史

半世紀以上に渡って、皇居のお堀に端正で硬質な古典美を映し続ける第一生命館（DNタワー）は、世界でも他に類のないほど数奇な運命を辿った建物です。関東大震災で倒壊した旧警視庁跡地にこのビルディングが姿を現したのは、一九三八年（昭和一三年）の秋。日本は既に日中戦争に突入、物統統制も始まっておりました。

第一生命保険相互会社の新社屋として設計された最新式ビルの6階北東隅には、最上階の7階までぶち抜いた大規模な集会室が備えられておりました。入社式や社員集會に用いるべく準備された空間は、完成直後に勃発した太平洋戦争期間中になると、戦地に送られる職員の仕事会や、女子挺身隊出陣式の会場としても使われることとなります。

様々な敗戦ドラマを至近距離で見守った第一生命館は、ポツダム宣言受諾後に日本を支配する占領軍（GHQ）に接収され、総本部が設置されます。最高実力者マッカーサー將軍の執務室を出て左に曲がった奥にある集會室は「ダイイチ・オーデイトリアム」と呼ばれ、占領軍本部で働く士官達の礼拝や娯楽の場所となります。また、毎晩夕方になると「ダイイチ・シアター」として日本未公開の最新アメリカ映画が本国と同時に上映され、祖国を離れた駐留兵を慰めました。

講和条約が締結された一〇五二年（昭和二七）の七夕の午後、第一生命館は無事返還されます。返還式では、独立を恢復した平和な文化国家日本の再出発を象徴するかのように、宮城を望む屋上で近衛管弦楽団の管打楽器奏者が「君が代」を奏でました。

## III：「メセナ」という言葉が生まれる前に

当時日本で最高のビルの中に生まれた新しいホールは、たちまち東京の舞台芸術や音楽の中心のひとつとなります。第一生命ホールで響く近衛管弦楽団の演奏は、発足したばかりの民放ラジオで毎週放送され、全国に音楽ファンを増やしました。まだほとんどなかったスタジオウェイピアノを備えたステージには、原智恵子、巖本真理、諏訪根自子、安川加寿子ら、当時の人気演奏家が次々登場します。

ですが、このホールの特徴は、それとはちょっと別なところにありました。

相互会社という特殊な形体を取る第一生命は、当初からこのホールの重要な使命のひとつは、公共の福祉であると信じていました。そんな信念が、朝日新聞福祉事業団と共催で開催する「第一生命ホール音楽鑑賞會」と「第一生命ホール室内楽鑑賞會」に結実します。才能はあるものの、ホール難や資金不足から演奏会開催が困難な若い音楽家を抜擢、ホール料金は無料にして、収益金は文化事業団を通して社会に還元することとしました。

ほぼ毎月行われたこの演奏会シリーズは、実質上「第一生命ホールの定期演奏會」として長く続けられます。現在ならば「企業メセナ」で済んでしまう活動でしょう。でも、未だ「メセナ」という言葉どころか、概念すらなかった一九五〇年代の話なのです。

興味深いことに、第一生命ホールに登場した音楽家に、所謂有名外国人演奏家はあまりおりません。ホールそのものが、聴衆が無条件で熱狂する有名人よりも、復興する文化国家を背負う若者の未来を信じ、その新鮮な芸術に感動しようとしていたかのようです。ピアノの長岡

## II：矢野社長の決断で「第一生命ホール」誕生

返還された第一生命館の6階集會室を目にした芸術関係者は、揃って驚嘆の声を挙げます。こんなに素晴らしい場所が東京のど真ん中に無傷で残ったなど、誰も知らなかったのです。

なにしろ空襲で東京は壊滅状態。焼け残った劇場は、日比谷公会堂や日劇、帝劇、歌舞伎座など数えるほどでした。とはいえそのどれもが大ホールで、小規模な演劇や室内楽、器楽リサイタルなどには不適當な空間ばかりでした。自身が梁田貞（「城ヶ島の雨」などの作曲家）の弟子で、数多くの寮歌作曲も手がけたアマチュア音楽家でもあった第一生命社長矢野一郎には、そんな訴えが痛いように判りました。そして、大きな決断をしたのです。この集會室をホールとして生まれ変わらせ、一般に開放すること。

日本中にホールが溢れる現在でこそ、企業の名を冠したホールなど珍しくありません。ところが、戦後間もないこの頃、ホール運営は役所の仕事。自社のホールを外部に提供する民間団体といえば、学校や新聞社、放送局など、公共性の高いところに限られていました（例外は、百貨店が運営した三越劇場くらいです）。そんなところに、興業や芸能とは無縁の生命保険会社が参入、社長室や役員會議室と同じ階にある施設を外部にオープンにする、ということです。現在は想像もつかないほどの勇氣と、なにより文化や芸術への本当の愛がなければ、不可能な決断だったことでしょう。

接收解除からわずか2ヶ月後の9月25日、反響板を設置し、照明や映写機設備まで備えた客席数〇〇余の本格的な小規模ホールとして、「第一生命ホール」は誕生しました。

純子や山岡優子、ヴァイオリンの岩淵龍太郎や海野良夫、チェロの青木十良、等々、現在でも長老演奏家として尊敬を受ける人々が、このホールの舞台を踏んでいます。

日本人を中心とする室内楽も頻繁に演奏されました。日本フィルのコンサートマスターとして来日した名人プロダス・アールが率いるアール弦楽四重奏団によるバルトーク弦楽四重奏曲第3番の日本初演や、プロムジカ弦楽四重奏団による日本人団体初のベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲連続演奏會など、日本の室内楽演奏史に残るイベントの舞台として、第一生命ホールの名は永遠に記録されることでしょう。

## IV：多目的ホールとして

第一生命ホールの舞台を飾ったのは、音楽ばかりではありません。築地小劇場を戦災で失った文芸座が杉村春子主演で『女の一生』や『欲望という名の電車』を上演し、三島由紀夫の傑作戯曲『鹿鳴館』が初演されたのもここです。劇団民芸も新作をかけています。ミュージカル路線を見出す前、アマイなど仏翻訳劇を専らにしていた劇団四季がほとんど常打ち小屋として使ったことは、余り知られぬ事実かもしれません。人の声を通る空間としてストレートプレイに最適、との評価も得ていました。

また、寄席不足を解消すべく始められた「若手落語會」も、このホールの大事な顔です。若き立川談志や古今亭志ん朝らが、客席に陣取った先輩から怒鳴られる姿は、古参ホールスタッフには懐かしい思い出です。

クラシック音楽に関していえば、第一生命ホールなど日比谷周辺の

黄金時代は、上野に東京文化会館が完成し、都内各区が自前の会館を持つようになった一九六〇年代に、事実上終わりを告げていました。それ以降も、第一生命ホールは、映画や演劇、室内オペラ（東京室内歌劇場の常打ち小屋としての活動は忘れられません）、合唱、声楽、マンドリンやギター音楽、なによりも邦楽の演奏家によって支持され、愛されました。

どんなに贅を尽くしたホールでも、多くの人に使われなければ、魂の通わぬ虚しい空間に過ぎません。古びるにつれ細部の重厚さがますます味わい深くなったお堀端の多目的ホールは、この場所を愛するスタッフの努力もあって、多目的空間として驚くほどの稼働率を維持し続けます。一九七〇年代から八〇年代の第一生命ホールほど、多目的貸しホールとして営業的な成功を収めた場所はないかもしれません。築後半世紀以上経っても、マッカーサーも足を踏み入れたホールは、「ただ消えゆくのみ」とはならぬ如才ない現役でした。

※

サントリーホールやカザルスホールなど、日本中に音楽専用ホールが次々と華々しく生まれる頃、老兵はどうとう姿を消すことになりました。第一生命館のEタワーへの建て替え工事のため、この空間の維持が構造上不可能となったのでした。一九八九年暮、多くの人に惜しまれつつ、お堀端の第一生命ホールは三七年の歴史を閉じました。

そして二一世紀、かつてのホールを出て、晴海通りを海に向かって小一時間ほど歩いた晴海の地に、歴史ある第一生命ホールの名を冠する空間が復活します。

その場所で、二〇世紀末にバブルに踊らされる虚しさを知った私たちは、芸術や音楽を楽しむとは人生にとってどういうことなのか、もう一度真剣に考えようとしています。矢野一郎は第一生命ホールが新文化国家の小さな実践場になることを望みました。同じ名を持つホールは、何を模索し、何を実践する場所になるのでしょうか。

『第一生命ホールものがたり』、『第一生命ホールの履歴書』

編纂執筆担音楽ジャーナリスト 渡辺 和